

- Guiraud : 意味論 (佐藤信夫訳)
- Bladley : The making of the English
- 小林 智賀平 : 言語学初歩

英語学概論

(文責 村上)

「天草版伊曾保物語における語彙について」 (漢語に注目して)

折 出 朋 子

漢語は、いつの時代にも、さまざまな形で、日本語の中に深く入り込んできた。しかし、漢語は、口語ではそれほど多く使われないと言われる。しかしながら天草版伊曾保物語は、口語表現であるにもかかわらず、漢語の量が多い。それは、日本耶蘇会が、伝道に使うためのことばは立派なものであることを方針としてきたから、上等のことばと考えられた漢語が、自然多く使われたのであろう。そこで、室町時代末期のキリシタン資料である、天草版伊曾保物語において、どういった漢語が、どのように使われているかという実態を見てゆくことにした。ここでは、

1. 国語に於ける漢語の品詞性
2. 漢語のよみ方の変化
3. 漢語の浸透

を、この一時期、一資料だけに焦点をあてて調べた。資料を天草版伊曾保物語にしぼったことは、文の内容から、天草版平家物語や、狂言、抄物などとは、語彙の質が違うと考えたからであったが、違った方面で道が開けていたかもしれない。伊曾保物語で漢語と和語に対する意識の違いはどうか、という問題も考えてみたが、ニュアンスの差こそあれ、漢語、和語ということでは使い分けされているとは考えられなかった。

まだ研究すべき点が、多く残っているように思う。これをひとつの経験として、これからも未知のものを求めてゆきたい。

参考文献

日本語の歴史

土 井 忠 生

近古の国語 (国語科学講座 V)

”

国語史序説	安藤正次
国語史概説	湯沢幸吉郎
国語史上の一劃期（日本文学講座才14巻）	春日政治
室町時代の言語研究	湯沢幸吉郎
吉利支丹語学の研究	土井忠生
吉利支丹文献考	〃
切支丹風土記	宝文館
南蛮広記	新村出
キリシタン文学（岩波講座日本文学史）	森田武
日本語の歴史4 移りゆく古代語	平凡社
国語の中に於ける漢語の研究	山田孝雄
漢文概説 日本語を育てたもの	藤堂明保
南蛮文学（岩波講座）	新村出
落葉集	
饅頭屋本節用集	
慶長中刊節用集	
乾本草書節用集	
語構成の研究	阪倉篤義
語構成の特質（現代国語学Ⅱ）	斎賀秀夫
国語学原論	時枝誠記
かたこと（国語学大系才19巻）	安原貞室
いはゆる湯桶説、重箱説について（成城文芸一）	山田俊雄
ロドリゲス日本大文典	土井忠生訳
鎌倉室町時代の言語	土井忠生

（文責 三村佳代子）